第一部

十九世紀のロシア小説

ガイダンス

皆さん、こんにちは。この授業では近現代のロシア小説についてお話します。第一部は十九世紀、第二部は二十世紀のロシア小説や批評を取り上げる予定です。残念ながら、十八世紀以前や私たちが暮らす二十一世紀はカバーできていません。

十九世紀から始めるのはいくつか理由があります。第一に、ロシア文学といえば十九世紀後半のリアリズム小説が世界的に有名なことが挙げられます。ドストエフスキーやトルストイの名前は作品を読んだことがなくとも聞いたことがあるでしょう。かつて日本では彼らの小説を読むことが教養の一部と見なされた時代がありました。今日ではそのようなことはありませんが、それでも『カラマーゾフの兄弟』の新訳が大ヒットするなど、ロシア文学への関心は今でもそれなりに根強いように思われます。

十九世紀から始めるもう一つの理由として、ロシアが本格的な近代化を経験したのが十九世紀であることが挙げられます。この点は本講義の主眼に関わるので、ここで簡単に説明しておきます。

ご存知の通り、ロシアは西ヨーロッパ（フランス、イギリス、オランダなど）に較べて、かなり遅れて近代化をスタートしました。中央ヨーロッパ（ドイツやオーストリアなど）と較べても遅れています。このことはロシアという国について語るときに欠かせない要素です。「遅れた近代化」はロシアの国家や社

会、文化、そして文学のあり方に決定的な影響を及ぼしました。

「遅れた近代化」はロシアだけに限ったことではありません。私たちの日本も同様です。お隣の中国や韓国・朝鮮もそうであり、他のアジア地域、アフリカ、中南米にも当てはまります。そうだとすれば、これらの地域――つまり世界の大半――には何らかの共通点があるのでないかと想定してもよいでしょう。すなわち、近代ロシアの経験は日本やその他の国々が経験したことと多かれ少なかれ似ているのでないかという仮説です。

この点で文学は興味深い観察対象となります。ロシアをはじめ多くの「近代後発国」が類似的な経験をしたとすれば、その類似性は文学作品にも表れているでしょう。別の言い方をすれば、十九世紀ロシア文学の特徴は、他の後発国の近代文学にも見出されるでしょう。その類似は偶然ではありません。というのも、近代後発国の作家たちは、外国の文学作品を読み、新しいテーマ（主題）やテクニック（手法）を学びながら、自国の近代文学を作り上げたからです。近代文学は、近代という時代（あるいはシステム）が世界に拡がるのと同時に、各国に広まりました。国を越えてよく似たテーマやテクニックが見いだされるのは当然と言ってよいでしょう。

この授業で考えたいのは「近代と文学」という問題です。とくに近代後発国における文学の使命という話題が中心になるでしょう。近代化というレースに遅れて参加した国々ではどのような近代文学が生まれたか。それはなぜか。ロシア文学の特徴はどれくらい他の国々の文学にも共通するのか――具体的にはこうしたことをお話したいと思います。

近代とは何か？ それはいつ始まり、いつ終わったか？ という問いはあまりに大きな問題で、このガイダンスで答えを出すことはできません。ロシア小説を題材に近代とは何かを考えてみるという予告にとどめておきましょう。

一つだけ言っておきたいのは、近代という時代がすでに終わったにせよ、まだ終わっていないにせよ、現代を生きる私たちにも影響を与え続けているということです。いや、影響という言葉では足りない。近代は私たちの今の生活の基盤をなしていると言うべきでしょう。

したがって、近代文学を読むことは私たち自身の生活や思考方法を見直す作業にもなります。外国の小説を読むことからその作業を始めるのは遠回りすぎるでしょうか。しかし、他者に目を向けることは自分をふりかえるためのきっ

かけになります。意外と近道かもしれません。

読書ガイド

アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か？』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、1993年。
白倉克文『近代ロシア文学の成立と西欧』成文社、2001年。
外川継男「明治維新前後の日本人のロシア観」、中村喜和、トマス・ライマー編『国際討論　ロシア文化と日本　明治・大正期の文化交流』彩流社、1995年、43–55頁。
乗松亨平「並行的他者との出会いのために」、『ゲンロン7』、2017年、40–43頁。
モレッティ、フランコ『遠読　〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎他訳、みすず書房、2016年。